

【論文】

黄翔詩歌におけるコスモポリタニズムについて

—— 〈○〉の世界を中心として——

劉 静 華

The Cosmopolitanism in Huang-xiang's Poems
——With the Focus on *The world of 「0」*——

Liu JING HUA

Abstract

Huang Xiang has often been evaluated a political poet. In this paper, however, I would like to argue that he is not a political poet, but a philosophical poet who seeks for the depth of the human soul. I also argue that he attempts to explore the essence of human beings as a whole in terms of contemplating between the Western concept of “Time” and the Oriental concept of “Existence.” Thus we come to comprehend the philosophical way for him to be a cosmopolitan substantiated by the fundamental idea of “the same root/origin for all things animate/inanimate.”

はじめに

黄翔の詩歌が、はじめて日本で紹介されたのは劉燕子（1965～作家、中国文学研究者）の『黄翔の詩と詩想』である。本書は思潮社が2003年に出版した研究書の中で売れ行きの最もよい1冊ではあったが^(註1)、日本における黄翔詩歌は依然として広く知られてはいない。その上、詩人に関する資料などの入手も困難であるため、黄翔研究は事実上停滞したままである。しかし、詩人はハーバード大学を始め、世界各地での詩作活動において、言語における限界を超越し、東洋の詩、朗読、書画に西洋の音楽と舞踏を取り入れ、その東西文化を融合させた立体的芸術を余すところなく表現し、人々を驚嘆させ魅了すると同時に、様々の視点より研究されている。詩人とその詩歌が日本においてもさらに知られるようになればと願いつつ本稿の執筆に至ったのである。

黄翔研究には、傅正明（1948～文芸評論家）の《黑暗诗人》が^(註2)ある。同書は、エンペドクレス（紀元前490～430）の「四元素説」と「易学」の色彩学より黄翔詩歌の唯美を分析し、ダンテ、ホイットマンとの共通性を論じた。また、張嘉諺（1948～文芸評論家）は「中国摩罗诗人——黄翔」において^(註3)黄翔詩歌の文体などを論じた。ほかにも多数あるが、Andrew J.Nathanの『Chinese Democracy』（1986）と《黑暗诗人》をはじめ、多くの論者は彼を〈政治詩人、民主運動の戦士〉とした。本稿はこれまでの研究と異なる観点により、黄翔詩歌及び70年代の啓蒙活動も含め、すべて人間の尊厳を渴望するヒューマニティーによるものであり、政治的意図によるものではないことを考察する。具体的

には、その詩歌の流れを追いながら、詩人の〈○〉の世界に到達するまでの詩作の読解を行う。その上で、その詩歌に現われる老子とハイデガーの思想を立脚点とするコスモポリタニズムを究明し、黄翔が哲学詩人であることを明らかにしたい。

一、詩歌に開眼してから

黄翔は、1941年12月26日中国湖南省武岡県に生まれる。父親は黄先明という。東京帝国大学（現東京大学）に留学し、政治学と哲学を学び後に国民党の将校となる。彼は両親の取り決めた婚姻を拒み、復旦大学で中国文学を学ぶ学生桂雪珊と自由恋愛し、結婚する。黄翔はこのような相思相愛の2人の間に生まれたが、故郷のしきたりによると、初孫は祖父母と第一夫人のもとで育てなければならない。それを理由に黄翔は一才未満で生母から引き離され、湖南省桂東県にいる祖父母のもとに送られる。後に父親が1949年の〈遼瀋戦役〉で共産党軍の俘虜となり、51年に銃殺される。その後、黄翔は母親との連絡も途絶えてしまう。

詩人は、1958年から詩作を始め、同年全国のコンクールに入選すると同時に中国作家協会貴州支部の最年少の会員となる。しかし、このように中国詩壇で脚光を浴びることは、この時が最初であって最後でもあった。その翌年の1959年から95年までの長い歳月において、詩人は、六回も投獄され詩作発禁処分を受けることになる。しかし、その生涯が過酷の中で展開されながらも、自由と生命の尊さを謳歌し、人間讃歌を続けた。詩人は人間性を破壊する不条理な時代に屹立し、殉詩者の十字架を背負い、詩作の地下活動を止めることはなかった。

僕の詩は／涙を通した真珠の輪／未来の人類の胸に掛け／古人の祝福を伝え／歴史の轟く嘆きを子孫に聞かせる（1966年）^(註4) 「予言」

この短詩は果たして予言となった。現在では、その不幸の時代を生きた先人達の経験は確かに人々の胸に〈轟く嘆き〉を成している。しかし、詩人は自らの生命を代償に中国全土のプロパガンダ芸術と抗争し、ひそかに〈個〉の芸術を守り続け、眠りにふける大地を目覚めさせようと努めたその活動は、当然ながら想像を絶する体験に裏打ちされている。1969年に書かれた「松明の歌」では、全体主義への拒絶をあらわにし、生命元来のありようを吶喊し、慈しみ合う人間社会の到来を渴望する。

ああー松明よ 千本の手を挙げよう 光を放つ手を／万個の喉を鳴らそう 光を放つ喉を／道路を呼び覚まそう 広場を呼び覚まそう／この世代のすべての人々を呼び覚まそう

ああー松明よ あなたの光明ある手で／心の暗室をすべて開けよう／見知らぬ者が知り合えるように／疎遠になった者が分かり合えるように／憎しみ合う者が親しくなるように／猜疑する者が疑わないように／憎しみを抱く者の耳も善良な声を聞けるように／醜悪な者にも美しいものを見せるように

偶像は詩よりも生活よりも美しいと言うのか／偶像は真理と叡智の輝きを遮ることができると言

うのか／偶像是愛の渴望、心の叫びをとめさせることができると言うのか／偶像是宇宙だ、生活そのものと言うのか

人間は人間自身の尊厳を回復し／生活は新たに生活そのものになるべきだ／音楽と善意を人類の心に充満させよう／美と大自然をよみがえらせよう^(注5)「松明の歌」

この詩は三段で構成されている長詩である。それぞれの段のフレーズに不一のリフレインを持たせながら、松明の光明を受けて真実を見つめる激昂した叫びとして、読み手を自ずと詩人の高揚に感染させ、すでに麻痺した五官が今一度現実を直視せざるを得ないのだと気づかされる。その端書きには、「8月13日午前10時窒息する中、インスピレーションが沸き、15日、涙に暮れて完成した」と書かれている。つまりこの時の詩人は暗黒に耐えられず、決死の精神で自分の思いを噴出させたのであった。〈光を放つ手〉で〈心の暗室をあけ〉、〈憎しみ合う者が親しくなるように〉、〈醜悪な者に美しいものを見せるように〉と謳う詩人の心底に流れる、慈愛に満ちたヒューマニティーが窺える。また、〈道路を呼び覚まそう、広場を呼び覚まそう、この世代のすべての人々を呼び覚まそう〉とは、詩人の渾身の情念による人々への覚醒を願ったものであろう。擬人法を用いた〈道路〉と〈広場〉への喚起は詩人の切実なる心象がストレートに読者に届いたに違いない。このような堂々と謳う啓蒙詩は黄翔がはじめてであり、胡適（1891～1962思想家）の新詩運動の系譜を継承しているように見受けられる。

1949年、中華人民共和国が成立し、長い間世界列強の植民地に陥っていた中国の再興において、不安な要素が国内外縦横に絡み合い混沌とした時代であった。共産党はソビエトを模倣し、極みないイデオロギー的警戒と制裁を行い、非自己の陣容の者を異端者として日常の細部に渡って、監視、拘束、取り締まりが行われた。幼い黄翔も祖父母と養母と同様に財産共有制法に従って、農民、〈異端者〉の国民党遺留家族として過酷な環境を生きる外はなかった。

60年代の中国詩壇と言えば、ソビエト社会主義リアリズムが導入され、大衆宣伝いわゆるプロパガンダ芸術が支配的であった。中央政府のイデオロギーに馴致させられた大衆に一切の言論や自由などを封殺し、毛沢東をはじめ党中央が讃える宣伝のみを思想的にその記憶に刻ませていた。毛沢東を神格化するためには、先ず毛の統制する社会の甘美さを大衆に思い込ませる必要があった。

百年遍歴して求索に苦しみ／挫折累々して失敗多し／真理はただ一つ証明し／社会主義こそ中国を救う^(注6)「共産党がなければ新中国はない」

この詩は、通俗的、宣伝的であり、リズム感が伝わってこない上、観念的である。当時日常的に〈毛沢東〉と〈社会主義〉を謳うものが多かった。60年代後半には誰もが口ずさむこんな歌もあった。

我／北京天安門を愛す／天安門より太陽が昇る／偉大な指導者毛主席／我らを導く^(注7)「我天安門を愛す」

しかし、この時の黄翔も謳う。

僕はみた／人間愛が退化したことを／活きた有機体の心理が失調したことを／精神分裂症が氾濫したことを／個性が消滅したことを／あーこの無形の戦争よ／この邪悪の戦争よ／お前は2500年余りの封建集権戦争の延長と継続だ／お前は2500年余りの精神侵害戦争の集中と拡大だ／あ——打て——砕け——殺せ——切れ——勝手にやれ／人間性は不滅だ、良識は不滅だ、人民の自由な精神は不滅だ／人類の心と体の自然な天性と欲求よ／それは永遠に奪いさられることも隠しきれることもないのだ^(注8)「僕はある戦争を見た」

これは、1969年文化大革命の真っ只中に完成した詩であった。生命力の漲る二十代の詩人が、命が危険に曝されるのも顧みる余裕はなく、青年期の朦朧とした憂悶と彷徨を乗り越え、時代の波頭に立つ。そして、渾身の情動を騒ぎ立たせながら目の前に立ちはだかる巨大な壁——革命社会に体当たりしていく。当時、〈人間愛、個性、人間性、良識、自由な精神、自然な天性と欲求〉という言語は多くの者の知らない言葉であって、知ってはならぬ時代であった。しかし、詩人は、それらのものこそ人間本来の有り様であり、個人崇拜を正当とする社会が、それを如何に〈打っても、砕いても、殺しても、切っても〉、〈永遠に奪いさられることも隠しきれることも〉ないと確信し謳歌した。詩人から見た革命社会とは、それは人間の〈退化、心理の失調、精神分裂〉であり、〈封建集権戦争の延長と継続、精神侵害戦争の集中と拡大〉であり、また人間性を抑圧し踏みにじることであった。詩人の渴望する社会は〈憎しみ合う者が親しくなるように、憎むべき者に善良の声が聞こえるよう〉なヒューマンな社会であった。その思想の根源は、記憶にない父親が残してくれた日記と書物に由来する。同時に詩人という道もそこから出発したのである。

子どもの頃（1952年）、私が触れた最初の詩は父が遺してくれた「文芸日記」に書かれたものだ。その刹那、夜明けの白光が茫々と広まり／梢と湖のさざ波を明るく照らし／光明の追求者よ／前進を急ごう／偉大なる太陽は漆黒の地平線から徐々に昇り始めている
この詩を読んだ時、私は顔が真っ赤になるほど興奮した。この詩こそ私の青春を燃やし続けた詩歌の日球、停まることなく拡大し、光明に対する永遠の追求と渴望を呼び起こしてくれた日球だ^(注9)。「殷紅荆棘の沉寂」

この「文芸日記」とともに、また父親の多くの蔵書も祖父の家で発見された。それらのものは、それからの黄翔に大きな世界を開き、書物の中で中国内外の先人達と邂逅することができた。老子、莊子、李白、杜甫、屈原、ニーチェ、カント、フロイト、ハイデガー、ゲーテ、ホイットマン、タゴール、マルクス、ワシントン、リンカーンなどの偉人は、後の詩人の人間形成において大いなる啓蒙と影響を及ぼし、自由、平等という近代思想も、それらの書物による総合的な精神から芽生えたものと思われる。詩人は、その多元的思想を受容したため、後の詩歌に現れる世界観も実に多彩多様で、特定の人物の影響があったというのは難しいが、後期の詩歌には老子の人間観、ハイデガーの時間性が同居しているように見受けられる。詩歌を見開いたのは、父親の「文芸日記」以外に、はじめて読まれたのは現代詩人艾青（1910～1996）という^(注10)。だが、実際にその詩歌に艾青の影響があったとしても、はっきりとした艾青の手法というものは見当たらない^(注11)。やはり父親の「文芸日記」によって詩歌に開眼し、〈光明の追求者よ、前進を急ごう〉と目覚め、詩人の道へ踏み出したと考えられる。

しかし、その父親が国民党将校であったため、また「黒五類」^(註12)と断罪され、小卒後、中学校に進学できず祖父母の畑仕事を手伝うことになる。もちろんそれは、当時の学校教育によるマインドコントロールから免れ、先達のさまざまな思想をありのままに受容でき、詩人自身の世界観を確立する好機会ではあったが、それも結局その後の社会生活との不調和を生じさせ、さらなる困難な状況を生き抜くという連鎖的悪循環ともなったのである。

1950年のある日、村の井戸に死んだ魚が夕日に照らされ、鱗が燦々と光り輝くのを見て、十歳未満の黄翔は、竿と縄で魚を釣り取ろうとした。その途端、何者かに不意に捕まえられた。それは村の農民隊長の大きな手であった。「この国民党の子が、井戸に毒を撒いたから、魚が死んだ」という。その後十数時間に渡って暗い小屋に閉じ込められ、街で見せしめにされ、人々の罵声を浴びることになる。

黄翔は、桂東県でこのような幼年時代を過ごし、迫害に耐えられず、後に貴陽市にいる叔父に頼み、ある機械工場で働くことになった。だが、生来天真爛漫の詩人は、自らの現実を正視できず、50年代後半、国家が若者達に中国のシベリアと言われる青海高原支援活動を呼びかけた勧誘にロマンを夢見る。若者達が組織的に派遣されているということも知らず、〈人民日報〉に書かれている「青海省へようこそ」の呼びかけを目にすると、果てしない草原、放牧する少女、群がる牛、羊、青い空……などが次々と思ひ浮かび、冒険とロマンを求める衝動に駆られ、簡単な荷物を手にそそくさと放浪の旅に出た。その結果、〈ソビエト逃亡罪〉による4年間の懲役を受けることになる。当時十八才であった。

詩人の幼年期と青年期が、こうした暗澹たる中にあったからこそ、後の詩作と活動では、生命における真実を追究してやまない由縁となったのであろう。その後のさらなる悪環境が続く中、待ちに待った中年期の開花が詩人自身の苦難なる遺産として、中国新詩の復興に啓蒙を与えたと言える。

1970年代以後、時代は急激に変化する。詩人は同人〈啓蒙社〉を^(註13)結社し、〈自由文学大爆発〉を^(註14)行い、朗読における行動芸術などを通して、〈五・四〉新文化運動以後の中国新詩の系譜を継承しようと立ち上がった。そもそも中国の詩は、古代より教化と鑑賞の性格があった。1910年代、胡適らにより旧詩の束縛から解放を目指す新詩運動は〈五・四〉新文化運動のイデオロギー普及に貢献した。その後、新詩は、西洋詩歌の啓発を受けながら、共和国成立までに詩とは何か、詩の言語とは何かと模索しつつ、新詩のあり方を構築しようとしたが、40年代建国期から、文革期に至る30年余りの間はプロパガンダ芸術の隆盛期となる。文革の終息を受けて黄翔はいち早く「〈五四〉新文化運動の反封建、反専制、反伝統の偉大な精神とじかに疎通をはかり、当代中国新文化の風潮を打ち出す」^(註15)ことに奮起し、新詩のあり方の開拓を試みたのであった。だが、その歴史的舞台には、まだ彼の精神を培う土壌はなく、彼を待ち受けていたのは度重なる投獄であった。

1993年、詩人はアメリカに招聘され、国際人権観察言論自由作家賞を受賞し、97年亡命を余儀なくされた。現在ニューヨークに在住する。時代を隔て、黄翔の詩歌も『当代詩潮回顧』（北京大学出版社1993）、『中国百年經典文庫』（海天出版社1996）などの大型叢書に次々と地下詩歌として紹介されている。

二、〈○〉の萌芽

私の創作は、すべて生命の内在なるものを表現したものだ。すべての創作は自覚と非自覚のもの、多くのものは無意識で予期できないものだ。前世紀78年の〈民主の壁〉に火を着けたことも含め、

計画的なものではなく、ただ圧迫された生命の衝動、或いは抑圧された精神が飽和状態に至った〈自爆〉だったのかも知れない。後になってやっと自分が何をしたか、この世界に何があったかに気がつく^(注16)。「旅途問答」

これは、2008年五月、十年ぶりに母国を訪問した際に張嘉諺との談話録に記載されたものである。その年、黄翔は高齢の母親に会うため、再び投獄される覚悟で帰国した。幸い無事に帰路につくことができた。二十日間あまりに渡って、張嘉諺は、その旅を共にし、過去の三十年間を回想しながら、『陰謀時代』談話録^(同注16)を綴った。張嘉諺は、80年代より一途に黄翔研究を続けてきた文芸評論家である。〈今後の方向性と意向〉を尋ねられた時、詩人は上述のように述べたのである。

その〈すべての創作は自覚、非自覚、無意識、予期できないもの〉とは、いわゆる詩人の芸術を生み出すオリジナリティーであろう。そこから〈生命の内在なるもの〉が言語としての詩、パフォーマンスとしての行動芸術が形作ってゆく。それ以前に反社会思想、具体的政治意図を以て活動する詩人ではないことが明らかである。同時に〈圧迫された生命の衝動、抑圧された精神が飽和状態に至った《自爆》〉とは、それは個体生命を支配する、解釈できない或いは解釈の仕様もない「情緒哲学」に^(注17)つながる。この詩学は、81年に書かれ、86年に整理され、「詩学その一」とされた。

情緒は、生命における奥義の騷擾であり、計り知れない原欲と激情の平静に対する破壊である。あらゆる形式はすべて〈情緒〉の感応である。

情緒哲学は、伝統文化的な、人為的な、人間という主体を離れた角度から世界を解釈しないことを意味する。

人間と宇宙の相互関係は「円」の調和である。「情緒哲学」

「詩学その一」から「詩学その五」までは、1981～92年の間に完成され、『沈思の雷暴』に^(同注17)収められている。「詩学その三」は「壺の中のハイデガー」と題して、カントがデカルトを継承し、ハイデガーがカントを継承したが、ハイデガーの〈概念の《壺》〉の中の〈非理性哲学は依然として理性的で、思惟と言語形式も依然として古典的〉である。〈存在とは定義でもなければ、把握できる語義構造でもない。それは規定されない生命情緒の直接性であり、〈理性の《領悟》の外に隠されていて、哲学情緒より《感応》するほかない〉と^(注18)指摘したが、後期の詩歌にはハイデガーの「時間性」の受容が見られる。それについて後半で考察する。

上に引用した「詩学その一」を読んでいくと、詩人の芸術活動は、始終〈宇宙〉と〈情緒〉における人間探求にあったことが察視できる。実際にその道のりで出くわした不遇な時代に当たっても、彼は、〈情緒〉のまま自身の芸術を貫いた。それはイデオロギー社会を直視できないことと違い、〈生命における奥義の騷擾〉、〈原欲と激情の平静に対する破壊〉という衝動に馳せられたからであった。〈後になってやっと自分が何をしたか、この世界に何があったかに気がつく〉ということも、詩人の不器用さとして受け止めるより、純粹に至る芸術の昇華と解釈するのが適切であろう。とすれば、詩人の芸術活動は、自身を実験台そのものとしていたことが理解される。当時の全体主義社会において、それは実に苦難に満ちた活動であった。詩人は、その過酷な現実を超越し生命の真諦を極めた時に、〈詩歌〉と〈宇宙〉の思考に至り、また、その探求によって孤独の魂が、ついに〈○〉の世界へ向っ

たように思われる。

詩人がはじめて謳った詩は、1962年に書かれた「独唱」である。

僕は誰だ／僕は瀑布たる孤魂／永久に人の群れを離れた／孤独の詩／僕の漂泊する歌声は夢の／
さすらう足跡／僕の唯一の聴衆は／静寂そのもの^(註19) 「独唱」

この短詩は、文化大革命の前夜——毛沢東の統制する民衆の〈大合唱〉の時代であり、〈個〉の〈独唱〉などは、決して許されるものではなかった。しかし、詩人は、それでも〈情緒〉の〈騒擾〉を受け書かずにはいられなかった。詩人の〈孤魂〉は、〈瀑布〉となって果てしない荒野に注ぎ込み無限に〈漂泊〉する。そして、この時から宇宙の〈静寂〉の中で、新たな次元による人間存在の探求も、無意識的に始まっていたのである。だが、この時の〈僕〉は〈孤独の詩〉と言っても、この〈詩〉がどのような〈詩〉なのかは、まだ知る由もなかった。

三、〈○〉の世界への展開

60年代、詩人は「松明の歌」や「僕はある戦争を見た」などのようなイデオロギー社会と真っ正面から向き合う詩を精力的に謳う一方、〈孤独の詩〉の探索も怠ることはなかった。

澄み切った小川／色鮮やかな円い小石／透明な河水に倒影された／木橋、石塔、揺れ動く小さな
イチョウの木
人は遥か昔河にいた／痩せこけた老犬を思うと／思わず涙がこみ上げる^(註20) 「小川の印象」

〈小川〉を眺望する〈人〉、一瞬の情景に触覚されたその心象は、朦朧とした哀感に包まれ、河の存在する長い時間を透視すると、人間の存在の短さに痛感する。〈老犬〉が先々の〈人〉自身であれば、この時の〈人〉はすでに超時空に存在し、過去と未来の間に立っている。忽然と悠久な時間を持つ河畔、普遍性を持つ青い水、丸い石、風雨と共存する石塔、木橋、イチョウの木などと対照的に自己の存在はこの時、脆弱で虚無的に思えよう。当然涙もこみ上げずにいられない。言うに及ばず〈人〉の背後にメタファーとしての詩人が投影されている。そこで詩人は、自身の存在と宇宙とのなんらかの〈感応〉を覚えたように思われる。同じ時期に書かれた「天空」がそれを物語る。

どんな色でお前を描けばいいのだろう／あー天空よ／遥かなる場所よりお前を仰ぎ／朦朧とした漆黒の水面を仰ぐようだが／お前の青い色の奥義を知ることはできない／お前は森羅万象で広大な境地／生と死の間で開いている／僕がまだ読めない一編の詩を／収蔵しているのだ^(註21) 「天空」

こうして「僕がまだ読めない一編の詩を収蔵している」天空を〈森羅万象〉の境地として、前述の「情緒哲学」が芽生え始めたに違いない。詩人は〈小川〉を見つめ、〈天空〉を仰ぎ、大地と宇宙の間の〈孤独の詩〉をなんとか解明しようとする。その上、自身の存在と時間についても思考し、「古松」を謳う。

お前はじっと故郷の小山に立っている／お前は無尽蔵の時間の中に放逐されたのだ^(注22) 「古松」

この二句のみの短詩は、〈古松〉の〈存在〉と〈無尽蔵〉の〈時間〉が思考されているほか、〈放逐〉されている〈古松〉の孤独感も窺え、「独唱」の漂泊する〈孤魂〉を連想させられる。それは、そのメタファーを受けている詩人自身或いは人間存在の荒涼感、孤立感が反映されている。しかし、この時〈無尽蔵〉の時間が意識されてはいるが、それについてははっきりした把握はまたなされていない。

上に引用した「小川の印象」、「天空」、「古松」の三首は、いずれも「小石の記憶」に収められ、69年の作品である。70年代の詩人は新詩運動に奔走し、モダニズム、ヒューマンニズムなどの総合的近代思想を中国の大地に広めようと試みた。この時期、存在と時間を謳うものは顕著に見られない。しかし、80年代に入ると〈古松〉を受け継ぐかのように再開される。

①「止まれ、抜け出させてくれ」と動転する円の中に落ちてゆく僕はその円に叫んだ。その円は依然として停まることなく周り、ちっとも僕を相手にしない。

② 僕は〈今〉懸命に踏付けている止むことなく移動している〈点〉の上より滑り落ちたいものだ。もしもこの内容のない空虚で知りようもない〈円〉の輪から抜け出せるならば。しかし僕は依然として偶然踏付けたこの不思議な空回りする○を踏付けている^(注23)。「私と〈円〉の感覚について」

詩集その四「非記念碑‘弱’の肖像」に収められているこの詩の、「動転する円の輪に落ちてゆく僕、その円は依然として停まることなく周り、ちっとも僕を相手にしない」と「お前は無尽蔵の時間の中に放逐されたのだ」とは同じ心境を表象している。しかし、この時、絶望的な孤立する存在を謳う一方、〈無尽蔵の時間〉もはっきりした〈円の輪〉として解明されている。つまり83年に書かれた「私と〈円〉の感覚について」は、69年に書いた「古松」に残された問題を解決したのである。いわば〈小川〉から、〈天空〉から「古松」に至っては、〈時間〉が意識され、〈円の輪〉に至ると時間が停まることなく回る〈円〉として捉えられたのである。

〈○〉という宇宙観は、古今東西多くの先達によって言い尽くされてきた。そして、その宇宙観において、今日の人々の〈時間〉と〈存在〉について様々な理論で論じられてきたのである。

釈迦牟尼は、仏教の「四諦八正道」の〈初転法輪〉において、それを象徴する仏法を説いていた。

老子は道イズムにおいて、それを「反者道之動」、「弱者道之用」、「周行而不殆」^(注24)と解釈した。いわば、「道」は静止するのではなく〈○〉のように停まることなく回り、回ることによって全体の均衡を保ち、自然回帰するということである。

ハイデガーは〈時間〉について、

時間性は、根源的な「おのれの外へと脱け出ている脱自」それ自体なのである^(注25)。『存在と時間』

と説き、〈存在〉については次のように説いた。

「現」という表現は、こうした本質上の開示性を指している。この開示性によってこの生存者（現存在）は、世界が現にそこに開示されて存在していることといっしょになって、おのれ自身にとっても「現」にそこに存在しているのである^(註26)。『存在と時間』

昨年10月6日付の筆者への書簡において、詩人は〈○〉について、次のように述べた。

〈○〉という詩は、無意識の中で創作し「詩集その四『‘弱’の肖像』」の最後の一首で、表題も詩の完成後に付けたものだ。その時になって、私もようやく心穏やかになり、落ち着いた心境で、〈○〉が宇宙生命のすべての〈存在〉の隠形の輪だと感知したのだ。

私にとって〈○〉は、‘浮世の夢’の中で、詩を以て哲学の形式を模擬して、‘宇宙の暗語’を解読しようとする追跡と試みである。

「私と〈円〉の感覚について」は、①の部分で、〈時間〉が〈円の輪〉と書かれている。従って、それには老子とハイデガーそれぞれの受容が見受けられる。

〈円の輪〉は、老子の〈停まることなく回り、回ることによって全体の均衡を保ち、自然回帰する〉（前述）と呼応する。また、「詩学その一『情緒哲学』」において、〈人間と宇宙の相互関係は「円」の調和である〉と述べたように、黄翔は、東洋的な〈全体の均衡〉を思考していたことは明らかである。しかし、その後の詩作には、ハイデガーの〈脱自〉的〈時間性〉が見られる。

ある空間が／新たな果てしない広さを持つ／ある天体が／新たな大きい蒼穹を持つ／我が身体に広がる細胞は／辿り着けない彼方にある／及ばない遥かなる星は／我が血肉の内に姿をくらます^(註27)「白日将尽」

〈脱自〉的〈時間〉とは、時空が自身の内から外へと踏み出て、また戻ってきて統一される。即ちはじめもなければ終わりもない、今の連続する時空のことである。〈我が身体に広がる細胞〉は〈辿り着けない彼方にある〉、〈及ばない遥かなる星〉が、〈我が血肉の内に姿をくらます〉というように、その〈連続〉する時空は、東洋的な円の循環だけとは限らない。様々の往来の〈連続〉が考えられる。しかし、「到達は未到達にある」において、また、〈生命の性質は無性質、人生の到達は永遠の未到達だ〉とも（黄翔詩歌総集下p619）書かれている。何故到達しないのか、それは詩人の世界が〈○〉であり、〈停まることなく回る〉からである。従って、黄翔の〈時間〉には、ハイデガーの〈脱自〉的〈時間〉と老子の〈自然回帰〉の時間が同居している。後者の時空は前者より大きく捉えることができ、その時、〈存在〉も包含されてくる。そのため、本稿はあえてそれを〈存在〉として論じたい。

「私と〈円〉の感覚について」の②の部分は、僕は《今》懸命に踏付けている止むことなく移動している〈点〉の上より滑り落ちたい、しかし僕は依然として偶然踏付けたこの不思議な空回りを踏付けているとある。それは明らかに〈存在〉についての思考と言える。

そして、この時の〈○〉は靈魂が如何に生まれ変わり、〈空〉を如何に悟り開くことを思考したの

ではなく、〈時間〉が〈○〉のように回っていたこと、自身の〈存在〉が〈○〉との関係の有り様という人間の現の〈存在〉が考えられていた。となれば、それはやはり老子の〈自然回帰〉とハイデガーを中心とする西洋の世界観における〈現存在〉が模索されていたように思われる。

世界が現にそこに開示されて存在していることといっしょになって、おのれ自身にとっても「現」にそこに存在しているのである ^(注26)

引用部分の、黄翔とハイデガーの下線部を対照して読むと、〈○〉が開示された世界とすれば、〈○〉を踏付けている僕は「『現』にそこに存在している」ということが理解されよう。しかし、黄翔の〈止むことなく移動している《点》の上より滑り落ちたい〉原因は、「小川の印象」、「古松」で謳ってきたように、極限の虚無感と孤独感に由来するものであり、ハイデガーの〈無気分のうちでおのれ自身に飽き飽きしている〉、〈存在が重荷としてあらわになっている〉^(注28)とは異質である。「詩学その一」において、「情緒哲学は伝統文化的な、人為的な、人間という主体を離れた角度から世界を解釈しないことを意味する」^(同注17)というように、黄翔は〈人間という主体〉を重視するため、〈現存在〉を強調し、やがてそこから更なる東洋的〈存在〉の有り様が探求されてゆく。筆者への書簡で述べているように、〈その時になって、私もようやく心穏やかになり、落ち着いた心境で、〈○〉が宇宙生命のすべての〈存在〉の隠形の輪だと感知した〉。詩人の〈孤独の詩〉における探求は、〈○〉の世界に昇華された時点で、詩人の自己回帰も到達されたはずである。その「心穏やか」な「落ち着いた心境」がまた新たな境地をはらみ、更なる自然回帰を遂げたのである。

夢津々／水汽濛々として／起きて巻き上げる／身体を覆う川の流れ／激瀧と光り輝く波の／緞子の布団 ^(注29) 「暮日独白」

2002年に書かれた「暮日独白」には、詩人が河を布団とする自然との一体化、且つ生命の源〈水〉と同居できた境地を獲得したことが、この詩を通して察視できよう。そして、〈○〉の世界における〈‘宇宙の暗語’を解読しようとする追跡と試み〉には、西洋的〈時間〉のあり方と東洋的〈存在〉の有り様の結合された世界観が見られる。つまり〈脱自〉された時空の中で、〈全体の均衡〉を保つ〈天人合一〉という境地に向かうということである。〈脱自〉された後の時空とは、いわゆる歴史性のある時間を持つことである。そのような時間の中で、〈全体の均衡〉が保てる人間社会を確保するには、私達に求められるものは、万物を愛し、万物と〈感応〉し合える関係になることと詩人が志向していたに違いない。彼自身の言葉に言い換えれば、「人間は自身の内面における深層を凝視すると、万物と共通の場所より集まり、共通の場所へ帰ってゆくことが分かる。万物は同源だ」^(注30)。

このように、国と文化を超え、人類全体の宇宙観を持つ詩人の世界観には、コスモポリタニズムが窺えよう。前述のMichelle Yehが論じた「彼は『質素に暮らし』、『束縛を受けることのない曠野』で一生（旅程）を過ごす。質素だからこそ深遠である」とは^(注31)、おそらくこのことであろう。

むすび

本稿は、〈○〉における考察を通して、黄翔は政治詩人というより哲学詩人というべきことを明確にした。その詩歌には、ハイデガーの時間性と老子の人間観が結合され、西洋の〈時間〉の有り方と東洋の〈存在〉の有り様が探求されたことも明らかになった。また、東洋と西洋を融合しながら、人類全体の〈孤魂〉を解釈しようとする詩人は、当然ながら、国、或いは、東西の境界を越えて、一人のコスモポリタンとして受け止めるべきことも理解されるのであろう。

なお、詩の訳は、語と意と場の間で戸惑いながら、その中間で訳を決めたものもあった。その過程で、詩人のテキストの真新しさに気づくことができた。その問題は今後の課題としたい。

註

(注1) 思潮社の関係者より聞く

(注2) Cozy House Publisher. New York 2003

(注3) 《黄翔詩歌总集》下 収録 Cozy House Publisher. New York 2007年

(注4) 詩の引用は《黄翔詩歌总集》上、下による 筆者訳 以下原文のみを記す

Cozy House Publisher. New York 2007年

我的诗／穿连着眼泪的珠串／挂在未来人类的胸脯／带去前人的祝福／

让后代听到历史的浩叹（下p20）

(注5) (略) 啊火炬 你伸出了一千支发光的手／张大了万条发光的喉咙／唤醒大路 唤醒广场／唤醒一世代所有的人们／啊火炬 用你发光的手指／扣开了每间心灵的暗室／让陌生的互相能够了解／彼此疏远的变得熟悉／让仇恨的成为亲近／让猜忌的不再怀疑／让可憎的倾听善良的声音／让丑恶的看见美／(略) 难道说 偶像能比诗和生活更美／难道说 偶像能遮蔽住真理和智慧的光辉／难道说 能窒息爱的渴望 心的呼唤／难道说 偶像就是宇宙和全部的生活／让人回复人的尊严吧／让生活重新成为生活吧／让音乐和善构成人类的心灵吧／让美和大自然重新属于人吧（略上p25～27）

(注6) 「沒有共產黨就沒有新中國」 筆者記憶より

經歷百年苦求索／挫折累累失敗多／真理證明只一個／社會主義救中國

(注7) 「我愛北京天安門」 筆者記憶より

我愛北京天安門／天安門上太陽升／偉大領袖毛主席指引我們向前進

(注8) (略) 我看见人性的性爱在退化／活的有机体心里失调／精神分裂症泛滥 个性被消灭／啊 你无形的战争呀 你罪恶的战争呀／你是两千五百年封建集权战争的延长和继续／你是两千五百年精神奴役战争的集中和扩大／你轰吧 炸吧 杀吧 砍吧／人性不死 良心不死 人类精神自由不死／人类心灵中和肌体上的一切自然天性和欲望／永远洗劫不尽 搜索不走（略上p34）

(注9) 「殷红荆棘的沉寂」『黄翔一狂飲不醉的獸形』天下華人出版社1998

(略) 孩提时代，我最早接触的第一首诗就是在父亲遗留于世的《文艺日记》中发现的。(略) 刹那间，白茫茫的晨光一片，已把树梢和湖面溶明。光明的追求者啊，你赶快向前推进吧，伟大的太阳正从漆黑的地平线上渐渐升腾。我激动得满面红光。这是焚烧我青春生命的越滚越大的诗歌的日球。它唤起了我对光明的永久的追求与热望。(略pXIV)

(注10) 艾青は1929年から1932年までは、パリで画家として、ピカソ、モネ、シャガール、ゴッホ、ゴーガンなどの印象派を学んだ。その上フランス滞在中、ボードレー (1821～1867)、ランポー (1854

～1891)、アポリネール(1880～1918)、ヴェルハーレン(1855～1916)、セルゲイ・エセーニン(1895～1925)、ブローグ(1880～1921)などの詩を愛読していた。

帰国後、上海で美術グループを結成し活動中に逮捕されるが、獄中で「大堰河」を発表し、以後詩人として活躍する。58年に右派と肅正され、中国の東北地方に送られた。

(注11)『鋒芒毕露的伤口』台湾桂冠丛刊2002

「致当代中国诗壇泰斗艾青」という書簡において黄翔は以下のように艾青を指摘し、画家出身の氏とは文体も異なる。

詩人艾青の詩は愛を書いていない。彼の詩集を余すところなく読んだ。しかし、人間的な永遠の愛を歌う緑の生命は読んだことがない。

音楽もほとんど聞こえてこない、その詩の内在の音楽が。彼の詩は一枚の絵、絵の画面だ、潜在的な楽しい思惟がない。

(詩人艾青的诗中没有爱情，我们翻遍他的诗集，找不到一片人性的永恒爱情的绿叶。

艾青也几乎没有音乐，诗的内在的音乐，他的诗是画，画面，没有潜在的东思。)

(注12) 50～70年代までの政治用語。

地主、富豪、反動分子(国民党残留者)、悪質分子、右派分子、およびその子女のことをいい、当時の社会の異端者として排斥される存在。それと対比して「紅五類」もいる。労働者、貧農・下層中農、革命幹部、革命軍人、革命烈士、及びその子女のことをいう。

(注13) 1978年11月24日、貴州詩人李家華、方家華、莫建剛らと天安門広場で結社した同人誌。

(注14) 1986年12月3～5日より、60年代ラテン・アメリカの〈Boom〉文学運動を概念に北京大学、北京師範大学、人民大学、中央工芸美術学院などで行われた行動芸術のこと。

(注15) 《鋒芒毕露的伤口》p39 台湾桂冠图书股份有限公司 2002

去直接触通「五四」新文化运动反封建，反专制，反传统的伟大精神，推出现当代中国新的文化潮流。

(注16) 《地球：生前的原乡与身后的遗址》p203 Cozy House Publisher. New York 2009

我所有的创作都是内在生命的外化，所有创作都是自觉和不自觉，更多的是无意识的没有预期的。包括上个世纪1978年“民主墙”点的一把火也没有预谋，只有高压下生命的冲动，或者说精神压抑处于饱和点的“自我爆炸”。过后我才意识到我做了些什么，这个世界到底已发生什么。(p203)

(注17) 「情緒哲学」《沉思的暴雷》(p94～98) 台湾桂冠图书股份有限公司 2002

情緒是生命奥秘的扰动，是不可捉摸的原欲和激情对平静的破坏。所有的形式都是〈情緒〉的感应。

这种哲学意味着不在从文化传统的，人为的，离开人的主体的角度去解释世界。

人与宇宙的相互关系是〈圓〉的自治。

(注18) 「现代「詩」学之三」(p121 p107) 《沉思的暴雷》台湾桂冠图书股份有限公司 2002

一把概念之「壺」。他的非理性哲学仍然是理性的。他的思维和语言形式仍然是古典的。

存在时什么：他不是定义，不是可把握的语义结构，而是无规定的生命情緒的直接性。

「存在」深藏于理性的「领悟」之外。

我们只能从哲学情緒上「感应」它。

(注19) 我是谁／我是瀑布的孤魂／一首永久离群索居的／诗／我的漂泊的歌声是梦的／游踪／我的唯一的听众／是沉寂(上p19)

(注20) 清凉的小河／花花绿绿的小圓石／透明的河水里倒映着／木桥 石塔 摇拽着的小银杏树(略) 人想起从前河水中那老狗的瘦影／泪水会颤微微地

涌上喉头（上p79）

（注21）我用一种什么颜色来描绘你呢 啊天空／我远远地望着你 像望着一片蒙胧的漆黑的水面／我不了解你那蔚蓝色的意义／你是一个包罗万象的意境／你里面收藏了一首我还没有读懂的／在生与死中敞开的诗（p103）

（注22）你一动不动地立在故乡的小山上／你被放逐在无穷无尽的时间中（上p82）。

（注23）「私と〈円〉の感覚について」（p304～5）

“停一停，让我钻出来。”我向我失落在里面的一个转动的圆圈儿呼唤。那圆圈还是分秒不停地转着，根本不领会我。（略）

我真想从沃“此刻”拼命踩住的不断移动的“点”上滚落下去，如果能够钻出这空无内容的不可知的“圈套”。

然而我仍然拼命踩住这个我偶然踩住的莫名其妙空转的○

（注24）『老子』40章25章上海古籍出版社 1986

（注25）『存在と時間』原佑 渡辺二郎訳 中央公論新社2008年再版
第三卷p65 第三章第六十五節「気遣いの存在論的意味としての時間性」

（注26）『存在と時間』原佑 渡辺二郎訳 中央公論新社2008年再版
第二卷p7 第五章第二十八節「内存在そのもの」

（注27）有一种空间／是另一种辽阔／有一种天体／是另一种大穹／密布我身上的细胞／有无可抵达的遥远／遥不可及的星辰／藏匿于我的血肉

（注28）第二卷p13 第5章第29節

「情状性としての現にそこに開示されている現存在」

（注29）睡梦／水汽迷蒙／醒来／掀起一条覆盖身上的河流／波光潋滟的缎褥（p549）

（注30）「情緒哲学」《沉思的暴雷》（p167）台湾桂冠图书股份有限公司 2002
人朝深层的自己望去，它与万物同一个来处，也与万物同一个去处。万物同源。

（注31）「另一种辽阔——读黄翔的诗」、《黄翔诗歌总集》上収録
Cozy House Publisher. New York 2007年

（略）他只是简单生活，过着‘海阔天空’的一生（旅程），因为简单，所以辽阔。（上p16）